

中小、零細の町工場が集まる東京都大田区。ここで金属研磨や人材派遣の4社が、業種の枠を超えて事業を起こそうと奮闘している。もとは「脱下請けプロジェクト」という自主的な集まりが発展して、会社組織のディープロジェクトを立ち上げた。地域の企業群をひとつの会社に見立てた



「チーム大田区」作りを夢見て、様々な試みが動き出している。

「このままでではつまらない。何か作ろう」。2008年のある日、自動車配管の継ぎ手部品製造会社、協立工機の鈴木正博社長(60)はそう考えた。同区の企業が母体となる異業種交流会に加わっていたが、18年目

ディープロジェクト (東京)



左から鈴木、大崎、生田の各氏

「チーム大田区」へ会社始動

に映し出す「まわる電子看板」。パネルが360度回転する一風変わった電子看板だ。「メンバーが每晚、遅くまで突貫作業で同年10月の展示会に間に合わせ、第1号を完成させた(鈴木氏)。この電子看板は、都庁が観光地の映像を流す宣伝塔として採用した。その後もメンバーはいくつかの製品に取り組んできた。噴射口が8つ付いて消火面積が広い消防ノズル、大田区に飛び込んできたニーズをすくい上げ、今秋から販売するのが「合体型印鑑」。2つのパーツから成り、組み合わせて初めて刻印の図柄が完成する。すでに引き合いもあり、手応えは大きい。

「自分たちの製品の販売だけでなく、様々なニーズを受け止めながら大田区の企業で開発も進めたい」。こう語るのは、人材派遣会社の社長(38)。ディープロジェクトの「社長」を務める。大崎氏は営業役を自任し、様々な企業と関わってきた人脈も生かしている。大田区には高いハードルがある。そこに本気で向き合うならば、企業の悩みをよく知る人材が必要になってくる。大田区にある技術が持つ意味を再発見できる人材だ。そうした目利き役が走り回るとき「チーム大田区」は動き出す。

「自分たちの製品の販売だけでなく、様々なニーズを受け止めながら大田区の企業で開発も進めたい」。こう語るのは、人材派遣会社の社長(38)。ディープロジェクトの「社長」を務める。大崎氏は営業役を自任し、様々な企業と関わってきた人脈も生かしている。大田区には高いハードルがある。そこに本気で向き合うならば、企業の悩みをよく知る人材が必要になってくる。大田区にある技術が持つ意味を再発見できる人材だ。そうした目利き役が走り回るとき「チーム大田区」は動き出す。

に入り、マンネリ化は否めなかった。この年の8月に交流会メンバーの4人と作ったのが、脱下請けプロジェクトだった。こうした製品の販売を進めようと、昨年10月、脱下請けプロジェクトはディープロジェクトという会社組織にした。協立工機などメンバーの4社が出資する研磨の生田徹也社長(43)